

56 心筋梗塞患者に於ける慢性期運動負荷心電図の非梗塞部ST変化の検討

大窪利隆、高岡 茂、田淵博己、小寺顕一、中村一彦、橋本修治（鹿児島大 二内）
片岡 一（大分医大 二内）

前回一肢及び多枝病変を有する下壁心筋梗塞症を対象とし、慢性期運動負荷心電図の非梗塞部ST変化について検討した。今回は前壁心筋梗塞症例を加え、前壁側及び下壁側の非梗塞部虚血の有無につき、運動負荷心電図ST変化、Tl-201心筋シンチグラフィ、及び心ブールスキャンで、それぞれの診断能を比較検討した。対象は前壁梗塞群28例（前下行枝単独病変20例、右冠動脈合併8例）、下壁梗塞群30例（右冠動脈単独病変19例、左前下行枝合併11例）である。下壁梗塞群で前壁側の虚血の診断の各検査法におけるaccuracyは、負荷Tl-201心筋シンチグラフィ90%、心ブールスキャン69.6%、心電図67%に対し、前壁梗塞群では下壁側の虚血診断能は、各々accuracy 89.3%、65.2%、60.7%であった。以上の結果よりTl-201心筋シンチグラフィの診断の有用性が示唆された。特に前壁梗塞群で、多枝病変例でも下壁誘導にてST変化を示さないものもあり、非梗塞部ST低下の病態と意義について、临床上注意すべきと考えた。

57 下壁梗塞症例における運動負荷心筋スキャンによる前壁虚血の検出

千葉 博、西村恒彦、植原敏勇、林田孝平、木原浩一（国循セン 放診部） 住吉徹哉、斉藤宗靖（同心内）

下壁梗塞後患者における運動負荷時胸部誘導のST低下及び前壁虚血の意義について、運動負荷心筋スキャンを用いて検討した。

対象は、RCA1枝病変群41例（A群）、RCAが梗塞責任冠動脈のLAD狭窄群22例（B群）の計63例（男57、女6、平均年齢54.0才）である。A群に於て、運動負荷時胸部誘導ST低下は13例（32%）にみられたが、そのうちシンチ上前壁虚血を呈したものはなかった。しかし、ST低下のみられなかった残り28例中、前壁虚血を示したものが3例みられた。B群では、胸部誘導ST低下は12例（55%）認め、このうちシンチ上前壁虚血を示したのは3例であった。またST低下を示さなかった残り10例のうち6例に前壁虚血所見を認めた。肺野の²⁰¹Tl uptakeはA群に比し、B群で高く、かつB群で前壁虚血を呈した例で最も高く、下壁梗塞患者での前壁虚血の検出には、肺野の²⁰¹Tl uptakeが有用であった。

58 急性右室梗塞の経過に関する核医学的検討

田原順雄¹、水野春芳¹、青木伸夫¹、豊福孝夫¹、小野彰史¹、岡田道雄¹、石川恭三¹、鮎川幸雄²、大里昭司²、古屋儀郎²、（杏林大学第2内科¹、同放射線科²）

心筋梗塞急性期に右室梗塞（RVMI）を合併した症例に関してその経過について検討した。対象は、下壁梗塞39例で急性期に心ブールスキャン（RNA）を施行し、1ヶ月後にはRNAと負荷心筋シンチ（EX²⁰¹Tl）を施行した。39例中18例は急性期にRNA上右室位相の遅延・振幅の低下を認めた。また、RVEFも $38.8 \pm 8.6\%$ と低下していた。1ヶ月後には18例中11例は、右室の位相・振幅は改善し、RVEFも $52.2 \pm 6.4\%$ と上昇した（RVMI-A群）。18例中7例は、右室位相・振幅の改善を認めずRVEFは $40.2 \pm 7.2\%$ であった（RVMI-B群）。EX²⁰¹TlではRVMI-A群は、右室のuptakeの低下はあるも限局した右室のdefectは認めなかった。RVMI-B群は、7例中5例に右室の心尖部から自由壁にかけて明らかな限局したdefectを認めた。急性右室梗塞は、急性期以降改善する右室虚血群と改善しない真の右室梗塞群が存在すると思われる。両群の鑑別には、RNA上のRVEF、右室位相・振幅像および負荷²⁰¹Tlシンチの右室描出像の相違が有用であると思われる。

59 Tl-201 wash out rate に及ぼす冠攣縮の影響

森 孝夫¹、山辺 裕¹、南地 克美²、紀田 利¹、五十嵐佑一郎²、宝田 明²、今井 直昭²、藤野 基博²、鏡 寛之²、吉田 浩²、前田 和美²、福崎 恒¹（神戸大学第一内科¹、兵庫県立姫路循環器病センター²、神戸大医療技術短大³）

Tl-201の初回循環分布及びそれ以後のkineticsに及ぼす冠攣縮の影響を明らかにするため、左前下行枝一肢病変を有する冠攣縮性狭心症（VAP）13例と労作性狭心症（EAP）12例に運動負荷Tl-201心筋シンチを施行し、虚血領域（中隔）の健常領域（後壁）に対するinitial uptakeの比（relative initial uptake）及びwash out rate（WOR）の比（relative WOR）を比較検討した。冠動脈狭窄度はVAP群でEAP群に比し軽度であった（ $76.9 \pm 17.3\%$ vs $91.8 \pm 6.8\%$; $P < 0.05$ ）が、Tl-201初期像でのrelative initial uptakeはVAP群とEAP群で同程度であった（ $77.9 \pm 7.0\%$ vs $80.7 \pm 8.3\%$; n.s.）。運動負荷時のrate pressure productはVAP群でEAP群に比し、やや高い傾向であった（ 25500 ± 4400 vs 21200 ± 6500 ; $P < 0.1$ ）が、relative WORはVAP群でEAP群に比し有意に低値であった（ $60.4 \pm 18.6\%$ vs $78.4 \pm 14.2\%$; $P < 0.05$ ）。以上より、VAP群では運動負荷時に冠攣縮の関与で器質的冠狭窄度以上の高度な虚血が生じるが、回復期には冠攣縮が解除し、Tl-201WORの低下に一部寄与するものと考えられた。